

伊能忠敬略年譜

延享 二年 (1745)

正月十一日、上総国山辺郡小関村の名主、小関家に生まれる。幼名三治郎。父親神保貞恒は小関家に婿として入っていた。

宝暦 元年 (1751) 6歳

母死去。養子であった父貞恒は、兄と姉を連れ、武射郡小堤村の実家へ帰る。忠敬は、父の養家に残される。小関家に残された三治郎は、小関浜の納屋に起居し、不遇の少年時代を過ごす。

宝暦 五年 (1755) 10歳

小堤村の父のもとに引き取られる。

宝暦十二年 (1762) 17歳

下総国香取郡佐原村の伊能家の娘達の婿養子となる。みち通称源六、後三郎右衛門、忠敬と改名。

宝暦十三年 (1763) 18歳

長女稲が生まれる。

明和 元年 (1764) 19歳

初めて江戸に行く。

明和 二年 (1765) 20歳

病気によりしばらく休養する。

明和 三年 (1766) 21歳

長男景敬生まれる。

佐原村凶作のため窮民を救済する。

明和 六年 (1769) 24歳

江戸に薪問屋を出す。

佐原村の牛頭天王祭で紛争、ライバルであった永沢家と義絶する。

明和 七年 (1770) 25歳

江戸の薪問屋が類焼し、薪7万駄の損失を出す。

安永 元年 (1772) 27歳

佐原邑河岸一件をまとめる。

安永 七年 (1778) 33歳

佐原村が天領から旗本津田日向守の知行地となる。

五月より六月にかけ、妻達を伴い奥州松島を漫遊する。この度の紀行文「奥州紀行」を著

す。

天明 元年 (1781) 36歳 地頭より佐原村本宿組の名主を命じられる。

天明 二年 (1782) 37歳 父貞恒死去。

天明 三年 (1783) 38歳 浅間山大噴火。利根川洪水などで関東大凶作。関西から売り米を求め、近隣の窮民に安く売り、

これを与える。堤防修築で活躍。

津田氏から苗字帯刀を許される。

妻達死去。

天明 四年 (1784) 39歳 名主を免ぜられ村方後見を命じられる。

天明 六年 (1786) 41歳 大凶作による関東大飢饉。上方より米穀を廻送し、江戸で距離を得るとともに、佐原の窮民を救

う。

二男秀蔵(敬慎・内縁の妻との間に)生まれる。

天明 八年 (1788) 43歳 この頃伊能家の酒造能力生産1480石で、佐原第二の酒造家。

寛政 二年 (1790) 45歳 信と二度目の結婚。

寛政 三年 (1791) 46歳 家訓をしたためる。

内容・第一 仮にも偽をせず孝弟忠信にして正直たるべし

第二 身の上の人は勿論下の人にも教訓異見あらば急度相用堅く守るべし

第二 篤敬謙讓とて言語進退を寛容に諸事謙り敬み少も人と争論成すべからず

寛政 四年 (1792) 47歳 津田氏より三人扶持を給せられる。

この頃、曆数に興味を覚え始める。

寛政 五年 (1793) 48歳 二月末から六月初旬まで久保木清淵らと京阪地方を旅する。

隠居前の伊能家の商売上の利益。

酒造 370両3分

田徳・店貸 142両1分

倉敷 30両

運送 39両3分

利潤高 450両1分

米利 231両1分

合計 1264両2分

寛政 六年 (1794) 49歳 隠居して家督を長男景敬に譲る。三人扶持を辞し、一人扶持を給せられる。

通称を勘解由と改める。

寛政 七年 (1795) 50歳 妻信死去。

江戸に出て、深川黒江町に居を構え、天文観測を始める。

天文方高橋至時の門に入る。

寛政 九年 (1797) 52歳 日本で初めて、白昼金星の南中を観測する。

寛政 十年 (1798) 53歳 エイ(栄)を妻とする。

寛政十二年 (1800) 55歳 (第一次測量) 幕府の許可を得、閏四月十九日(6月11日)奥州街道、蝦夷地南岸を測量し、十

月二十一日(12月7日)江戸帰着。内妻栄の協力で実測図を作り、幕府に上程する。

蝦夷で間宮林蔵と会う。

享和 元年 (1801) 56歳 幕府より苗字帯刀を許される。

(第二次測量) 四月二日(5月14日)江戸を発ち、伊豆から陸奥までの本州東海岸と奥州街道を

測量。十二月七日(翌年1月1日)江戸着。

享和 二年 (1802) 57歳 前年測量の地図を幕府に上呈。

(第三次測量) 六月十一日(7月10日)江戸発。出羽街道、陸奥から越後までの日本海岸、越後

街道、中山道の一部を測量、十月二十三日(11月18日)江戸帰着。

享和 三年 (1803) 58歳 前年実測の草稿図を幕府の閲覧に供する。

(第四次測量) 二月二十五日(4月16日)江戸発。駿河から尾張、越前、越後の海岸、佐渡島を

測量し寺泊、清水越、高崎を経て、十月七日（11月30日）帰着。越後糸魚川で、地元役人と衝突し問題が起きる。

このころ、栄が行方不明になる。

文化元年（1804）59歳 師高橋至時が死去する（40歳）。

東半分の沿海地図を作製。幕府に提出し、將軍家斉の閲覽を受ける。

この功で、幕吏に登用される（十人扶持小普請組）。

天文方高橋景保に属し天文方の手附（手伝）となる。

文化二年（1805）60歳 （第五次測量）二月二十五日（3月25日）江戸を発ち、東海道筋、伊勢、紀伊の海岸、淀川筋、琵琶湖畔、算用海岸を測量。岡山で越年。

備中以西の瀬戸内海、山陽道、島々、山陰、老岐、隠岐島（忠敬は病気のため松江に留まる）を測量し、十一月十五日（12月24日）帰着。

文化三年（1806）61歳 長孫三治郎生まれる。

門人平山郡蔵、小坂寛平を破門する。

文化二年～三年（畿内、中国地方など）の測量地図を上程する。

文化二年（1807）62歳 深川黒江町の自宅を地図御用所にあて、ここで水作成にあたる。

文化五年（1808）63歳 （第六次測量）正月二十五日（2月21日）江戸を発ち、畿内沿岸、淡路、四国沿岸、大坂、奈良、吉野当を測量。伊勢山田で越年。

正月十八日（3月3日）帰着。

四国など第六次測量の地図を作製、上呈する。また幕命により、「日本輿地図稿（仮製日本地図）」作成。

（第七次測量）八月二十七日（10月6日）江戸発。中山道、山陽道を測量し小倉で越年。

文化七年（1810）65歳 小倉から豊前、豊後、日向、薩摩、肥後の沿岸、薩肥街道、天草島を測量。さらに熊本から大分

に出て越年。

文化七年（1810）65歳 小倉から豊前、豊後、日向、薩摩、肥後の沿岸、薩肥街道、天草島を測量。さらに熊本から大分

に出て越年。

稲の夫盛右衛門死去。盛右衛門は勘当の見であったので、稲は剃髪して妙薫と改め、許されて佐原に帰る。

文化八年（1811）66歳

大分から小倉を経て、下関から中国地方のおもに内陸の諸道を測量。さらに美濃、三河から信濃への諸道、甲信街道、甲州街道を測量して、五月八日（6月28日）江戸帰着。文化六年以降の測量地域地図完成。

この頃、間宮林蔵は忠敬の居室に寄寓して、天体観測などの技術を実習する。

（第八次測量）十一月二十五日（翌年1月9日）江戸を発ち、富士山近傍を測量したのち、摂津で越年。

文化九年（1812）67歳

郡山から九州に渡り小倉、熊本を経て鹿児島に入る。屋久島、種子島測量。内陸部の諸道、筑前、築後、肥前の沿岸を測量して松浦郡で越年。

文化十年（1813）68歳

平戸、老岐、対馬、五島列島を測量。七月十五日、右腕とも頼む坂部貞兵衛が五島福江で病死する。

長崎、博多、小倉を経て中国地方内陸部を測量し、姫路で越年。

長男景敬死去（47歳）。

文化十一年（1814）69歳

姫路から近畿主要残部を測量。さらに飛騨街道、松本平、善光寺平、中山道等を経て五月二十二日（7月9日）江戸帰着。

帰着後、居を八丁堀亀島町（現中央区茅場町二丁目）に移転。ここを地図御用所とする。

景敬の喪を發し、嫡損忠誨（三治郎）を後嗣とする。

文化十二年（1815）70歳

（第九次測量）二月、江戸府内予備測量。

四月二十七日（6月4日）伊豆七島へ測量隊派遣（忠敬は老齡のため不参加）・下田街道、

伊豆七島、伊豆東海岸を測量し、熱海で越年。

文化十三年（1816）71歳

測量隊は箱根付近、大山街道を測り、八王子、川越、熊谷を経て四月十二日（5月8日）

江戸着。

測量地域の地図を上呈。

(第十次測量) 閏八月八日(9月) ~ 十月(12月) 江戸府内第二次測量。

この頃、伊豆七島の地図完成。

「大日本沿海輿地全図」作成に取り掛かる。

「大日本沿海輿地全図」制作。

四月十三日(5月17日) 八丁堀亀島の自宅で死去。喪は伏せられて地図製作続く。

遺言により遺体は浅草源空寺(現台東区東上野六丁目)の高橋至時墓の側に葬られる。

伊能忠敬歿後の関係年譜

文政 四年 (1821)

友人久保木清測を始め測量所の吏員や門弟たちにより、七月「大日本沿海輿地全図(計225葉)」及び大日本沿海実測録(14巻)が完成し、高橋景保の序文を付けて上呈される。

九月四日(9月29日) 初めて忠敬の喪を公表。

妙薫病没。

シーボルト事件。

オランダから派遣されたドイツ人医師市へボルトが、高橋景保から入手した伊能特別小図を始め、国禁の図書多数を持ち出そうとしたことが発覚。シーボルトはこれらが押収されることを予知し、地図を徹夜で写してバタビア(オランダ植民地時代のインドネシアの首都ジャカルタ)に送った。

高橋景保牢死。

江戸条約に基づき、イギリス海軍の測量船来日。この時艦長は偶然にも幕吏が所持していた

文政十二年 (1829)

文久 元年 (1961)

文久 三年 (1863)
 慶応 三年 (1867)
 明治 六年 (1873)
 明治 七年 (1874)
 明治十六年 (1883)
 明治十七年 (1884)
 明治二十二年 (1889)
 大正 八年 (1919)
 大正十二年 (1923)
 昭和三二年 (1957)
 昭和四〇年 (1965)
 平成十三年 (2001)

伊能小図を見て、幕府からその写しを入手する。

イギリス海軍水路部が「日本政府の地図から編修」と明記した「日本沿海図」を発行。幕府開成所が伊能小図を基として「官板実測日本地図」を発行。

オーストリアのウィーンで開かれた万国博覧会に、伊能小図（864000分の1）の近代版を作成して出品。

皇居の炎上により、政府保管中の幕府から受け継いだ伊能図焼失。

伊能家が伊能図の控図（副本）を政府に献上。

2月27日、正四位を追贈される。

陸軍参謀本部測量局で伊能図を主体とした全国的地図として輯製20万分の1の編集を始める。

東京市芝公園に「贈四位伊能忠敬先生測地遺功表」（青銅）が東京地学協会によって建設される。ただし、戦時中の金属回収により撤去される。

佐原町諏訪公園に伊能忠敬銅像が建てられる。

関東大震災により、東京帝大付属図書館が火災になり、明治政府から保管を委託されていた伊能図が焼失。

伊能忠敬の遺書、遺品等215点が国の重要文化財に指定される。

東京芝公園に東京地学協会によって「伊能忠敬測地遺功表」が再建される。

アメリカのワシントン議会図書館で、「大日本沿海輿地図」の大図（3万6千分の1）214枚のうち、206枚の写本が発見される。

《資料》

『伊能忠敬』大谷亮吉著

『伊能忠敬書状』千葉県

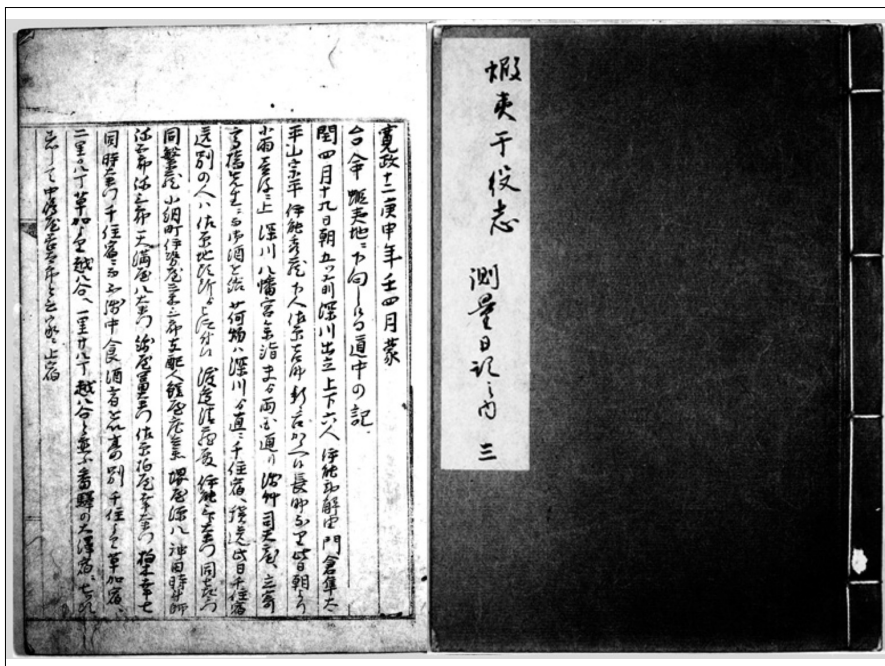
Wikipedia InoPedia

伊能忠敬測量日記 解説

伊能忠敬の測量日記は、伊能忠敬が測量しながら書いた「忠敬先生日記」という表題の51冊と、彼自身が後に清書した「測量日記」という名称の清書本28冊の2種類があり、現在、千葉県香取市の伊能忠敬記念館に伝存されていて、2010年6月29日、いずれも国宝に指定された。

この「伊能忠敬測量日記」28冊の原文が「伊能忠敬と伊能図の大事典を作る会」により、DVDに纏められ販売されている。

<https://www.inopedia.tokyo/eshop/>
税込み価格20,000円。



伊能忠敬測量日記

千葉県香取市「伊能忠敬記念館」蔵

提供・伊能忠敬研究会 Inopedia